

緑とビオトープを増やす試み

東京学芸大学名誉教授 / NPO 法人センスオブアース・市民による自然共生パンゲア 顧問
佐島群巳

日本では、絶滅した佐渡のトキ（ニホニア・ニッポン）のほか、ナルトオウギ・オリズルスマレ・ムサシタイゲキなど自生している姿を見ることが出来ません。

絶滅が心配されている生きものを保護する運動が各地で、起こっています。例えば、有明海のムツゴロウ、霞ヶ浦のヒシクイ（ガンの仲間）川崎市生田緑地のホンドキツネ、アマミノクロウサギ等です。

都市を取り巻く環境は開発が進められ、そのため生きものたちが安心して住める場所が少なくなってきました。かつて、夏には、うるさい程蟬の鳴き声が聞けました。田んぼには、蛙の鳴き声、秋には赤トンボなど、牧歌的な心休まる環境でした。

年々、生きものが見られなくなってきました。生きものの住む場所が失われてきた証拠です。私たち、NPO法人「センスオブアース」では、市民による生きものと人間との共生する環境づくりを目指した活動をしています。

まず、学校ビオトープや、地域の自然再生の活動を支援しています。小中高・大学などで授業で活用する支援や、ビオトープなどの情報を提供したり、各地に広げる活動に参加したりしています。また、緑化によるCO₂削減のための地球温暖化防止地域協議会のメンバーとして、市民が出来る温暖化防止の活動を呼びかけて行くところです。

いくつかの学校では、今、アサガオ、ヘチマ、ゴーヤなどのつる性植物を栽培したり、屋上に芝生や花壇をつくったりして、緑を増やす努力をしています。これも、CO₂を減らしたり気温を下げたりすることができ、地球温暖化を防ぐことにつながる大事な試みです。板橋区では、この活動が大きく広がろうとしています。

こうしたビオトープや緑を増やす体験学習は、生きものと自然とのつながり、人間らしく生きることの大切さを体得できる活動です。このような試みが全国に広がっていくことを期待しています。そのために、環境活動のネットワークが広がり、情報を共有しながら、励まし学びあっていく緑とビオトープネットワークの発展を心から、応援したいと思います。



センスオブアース顧問就任式での
佐島群巳先生

高島第六小学校

学校ビオトープが、教育に役立つ生きた教材として広く認められるようになりました。板橋区としては、すでに7校が造り、引き続き毎年1校のわりあい学校に造設されていくことになっています。発展していく学校ビオトープの現状を、板橋で初めての設置校である高島第六小学校の校長室にお邪魔してお聞きしました。



熱心に質問を聞く植松校長先生

Q「初めてビオトープを造られたきっかけは？」

植松校長先生「平成10年2月に環境保全課から、話があり、高島六小として、「子どもたちに自然とふれあえる場を提供してあげたい」という先生方の思いが一致して設置が決まりました。板橋区の初めての試みということですので業者が行い子どもたちや先生方、保護者の参加の場面はありませんでした。」

Q「2回目のビオトープづくりは、全く違ったり組みでしたね。」

植松校長先生「そうです。今度は平成14年度、高島第四小学校の子どもたちと統合するため、人工地盤の上にあった高島第四小学校の子どもたちに、たくさん自然に触れてもらおうと、前の年につくりました。そのとき子どもたちからビオトープ案を募りました。先生の方は環境分科会が出来ました。」

Q「地域の協力はどうでしたか。また子どもたちはどんな参加をしたのでしょうか。」

植松校長先生「工務店をやっておられた方が全面的に下工事を引き受けて下さいました。また、子どもたちは、土のうづくり、土掘り、シート敷き、土盛、粘土張りを行いました。」



循環装置がついて水のエコ利用が出来る
第二のビオトープ

Q「校内の先生方はどんな目標で、子どもたちを導いていかれたのでしょうか。」

植松校長先生「統合後の子どもたちの目標は、ひとつになることでした。新生一高島第六小学校として。子どもたちは、はじめは、人とも、自然ともふれあうことが少ない状態でした。人との関わりも下手で、人の話は聞かないが、自分の言いたいことを言うという感じでした。」

開校記念式典で、私は「手と手をつなぎ、心を通わせ希望を持って夢を実現していく学校」と呼びかけました。」

Q「授業では、どんなとり組みをされたのですか。」

植松校長先生「平成14年・15年の校内研究で《人や自然とのふれあいを通して意欲的に学ぶ子》を目指しました。平成16年度は《人や自然とのふれあいを通して心豊かに学ぶ子》を目指し、3年間、人と、自然とのふれあいを目指しました。」

Q「その結果、子どもたちはどうなりましたか。」

植松校長先生「子どもたちは“統合”し、一つの学校になりました。今は、とても落ち着いています。今、4年生は、ぼくの木・私の木のとり組みで、樹木の観察を1年間続けています。3年生はビオトープの観察やヤゴの救出、虫の観察や飼育をしています。卒業生が学校の樹木の名前と木の特性を調べ名札をつけていってくれました。堆肥づくりもみんなで行っています。」

Q「ビオトープの維持管理・補修は大変ですね。高六小の方法を教えてください。」

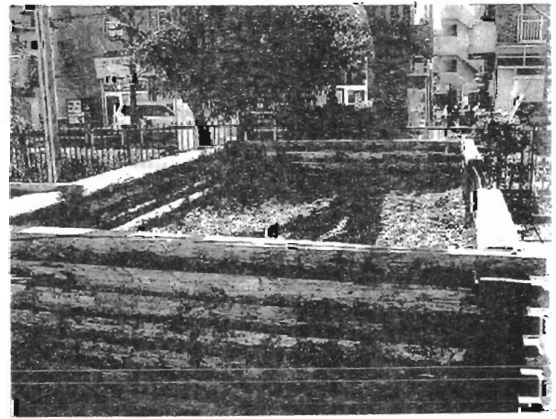
植松校長先生「子どもたちの中にビオトープ委員会があって、観察やボール拾い、掃除など行っています。水は、地域の方の協力で循環装置を取り付け昼間のみ動かしています。先生方は環境委員会が中心となり、年に何回か職員作業を行っています。」

Q「今回、全国で9校のモデル校づくりの1校に選ばれましたね。」

植松校長先生「NTTドコモグループ“学校ビオトープづくり助成事業”の対象に選ばれました。子どもたちが保護者・地域の方々と自然生態系を学ぶ学校を目指していくものです。」

Q「これまでの努力の結果ですね。先生のこれからの願いはなんでしょうか。」

植松校長先生「ビオトープに来て新しい発見をしていく子と、遊び場にして荒らしてしまう子がいます。心を育てていきたい。地域の方にも、ビオトープにふれてほしいと思っています。」



立派な丸太づくりの落ち葉溜め およそ13m²

Q「校庭の自然を生かした施設は他にありますか。」

坂口副校長先生「みんなで造っている堆肥溜めが2カ所もあって、ものすごい量の肥料が出来ています。地域の方にも分けているくらいです。樹木もたくさんあるので、自然が豊かな学校です。一つの堆肥溜めは職員が造ったんですよ。」

校内をまわる取材中、植松光一校長先生と坂口佳隆副校長先生のお話から、熱心に環境教育に取り組んでこられた情熱と、身近な環境に働きかけていく子どもたちを育てる強い信念を感じずにはいられませんでした。

S.O.E. ニュースフラッシュ

板橋環境会議 主催

第4回 環境なんでも見本市

地球温暖化防止のために私たちが今できること

2月11日(土)・12日(日)

於・板橋区立エコポリスセンター

環境に関する活動を積極的に行っている区民、環境団体、教育関係者、学校、事業者(企業)、行政など41団体が、それぞれの活動や環境への取り組みについて知ってほしいこと、知らせたいことを展示、発表を行いました。S.O.E.も「環境なんでも展示会」に参加し、これまでの活動を紹介させていただきました。地方自治体として早期から環境ISOを取得し、実績を上げてきた板橋区が、「地球温暖化防止」というとてつもなく大きい、全世界的な課題に向けて、着実に動き出していることが印象に残るイベントでした。



S.O.E.の展示 これまでに発行したニュースのバックナンバーも配付

各出展者からの出題をもとにしたクイズラリーなどもあり、会場は、子どもから大人まで幅広い年代層で賑わっていました。

(財)日本生態系協会主催

全国学校ビオトープコンクール2005

広い世界が見えてきた

2月11日(日)

於・国立オリンピック記念
青少年総合センター
カルチャー棟大ホール

今年で4回目を迎え、文部科学省、環境省、そして後援に新たに国土交通省が加わったことで、学校ビオトープに対する社会の期待がいかに高まっているかを伺わせました。今回の特徴は、都市部の学校よりも地方都市の自然に恵まれた地域の学校が多いことで、自然の豊かなところでも、室内遊びをしてしまう子どもたちのために環境教育が必要であり、とくに学校と子供たちが地域社会にもたらす活力への期待という側面も学校ビオトープにあることが実例、実践を通して感じられた大会でした。コンクール後の懇親会では、中央審査員を勤められた顧問の佐島先生とS.O.E.のスタッフも、受賞校やこのコンクールを支えている、主催者、後援者の皆さまと交流、情報交換をするなかで、環境教育の重要性を再認識しました。

ビオトープコンクール会場で
左から佐島群巳顧問、寺田茂理事長、田中雅文理事



発行

特定非営利活動法人 センスオブアース・市民による自然共生パンゲア

東京事務所 東京都板橋区前野町4-8-6 (〒174-0063) phone: 03-3960-6052 fax: 03-3960-6053
e-mail: info@npo-soe.jp url: www.npo-soe.jp